



○聖書にふれる会（センター教員・李元重）

「聖書を読む」とは、「聖書に聞く」ことでもあり「聖書に問う」ということです。聖書は、歴史の中で神が人間に語りかけた記録でもあるからです。その神は今もなお聖書を通して、わたしたちとの出会いを求めておられると考えています。新約聖書の「ルカによる福音書」にふれることで、その神とご自分を少し見つめ直してみませんか。お気軽にお越しください。

（毎週火曜日 13：15～14：00）
同志社京田辺会堂 光館(HIKARI-KAN)チャプレン室

○聖書を学ぶ会（センター教員・森田喜基）

聖書には私たちの人生を照らす言葉や、深いメッセージが詰まっています。この会は月一回程度の開催で、よく知られている聖書のトピックを学びます。春学期は旧約聖書から、秋学期は新約聖書を紐解きます。いろいろな聖書翻訳の読み比べや話し合いを通して、皆さんと一緒に学びを深めていく会です。聖書に少しでも興味があれば、ぜひ一度覗いてみてください。

（開催日、場所等についてはキリスト教文化センターWebサイト、学内掲示板をご覧ください）

○スタートアップ：聖書の扉（チャプレン・川江亜希子）

辛い時、悲しい時、苦しい時、自分の行き場が見つからない時。自分自身をすぐに変えられることができない時があると思います。けれども、ある時ふと出会う言葉や人によって、新しい視点が与えられる時があります。そんな新しい視点との出会いを、聖書を開いて見つけてみませんか。聖書の言葉を知る時間、どなたでもお越しください。途中入室も大丈夫です。

（毎週金曜日 13：15～14：00）
同志社京田辺会堂 光館(HIKARI-KAN)チャプレン室

○聖書を味わおう（チャプレン・仲程愛美）

聖書はこれまで時を超え、場所を超えて読み継がれてきました。さまざまな事柄が記されているこの書物を手に、人々は語り合い、喜び合い、励まし合い、時に疑問を持って追求しました。一人でじっくりと読むのも良いですが、誰かと感想を分かち合いながら読むことも、新しい発見や気づきがあり魅力的です。聖書の「ことば」や「人物」に出会いながら、ご一緒に聖書を“味わい”ましょう。

（毎週金曜日 13：15～14：00）
クラーク記念館1階ラウンジ

各行事は都合により、変更になる可能性があります。
最新情報は、キリスト教文化センターWebサイト、学内掲示板をご覧ください。

お知らせ

○Doshisha Spirit Week 2024 春

6月10日（月）～6月15日（土）
同志社大学の歴史や建学の精神、新島襄についての講演など、同志社を学び、知るための企画を行います。創立の志に触れる1週間です。それぞれの会場を含め詳細については、キリスト教文化センターWebサイト、学内掲示板をご覧ください。
〈京田辺校地〉

6月10日（月）12：30～13：00
演舞 同志社大学応援團
場所：ローム記念館 劇場空間
6月12日（水）12：35～13：00
ランチタイム・チャペル・アワー
同志社香里中学校・高等学校聖書科教諭 富田 正樹

「未完成というアドバンテージ」
会場：同志社京田辺会堂 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂
6月13日（木）13：10～14：40 講演会
日本キリスト教団高槻日吉台教会牧師 吉岡 恵生

「同志社『尖り』が時代を拓く」
会場：同志社京田辺会堂 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂

2024年9月中旬まで
同志社京田辺会堂 光館(HIKARI-KAN)ラウンジ展示第19期展
「新島襄と自然科学
—同志社のキリスト教主義と科学—」
会場：同志社京田辺会堂 光館(HIKARI-KAN)ラウンジ
〈今出川校地〉

6月11日（火）12：35～13：00
出張チャペル・アワー（新町キャンパス）
キリスト教文化センター准教授 森田 喜基
「一人一人大切ナリ」
ヴァイオリン演奏：
バークリー音楽大学生 山根 基嗣
会場：新創館 アカデミックプラザ

6月12日（水）10：50～11：30
チャペル・アワー
宣教落語家
ゴスペル亭パウロ（本名：小笠原 浩一）
「新島襄・八重と同志社大学」
会場：同志社礼拝堂
〈オンデマンドによる講演会〉

6月10日（月）～15日（土）
共愛学園前橋国際大学宗教研 古澤 健太郎
「共に愛し合う精神
～同志社が上州に蒔いた種」
※配信先はQRコードからアクセスしてください。



チャペル・アワー案内

2024年6月1日

No.264

同志社大学

キリスト教文化センター

京田辺
0774-65-7370

今出川
075-251-3320

本センター
Webサイト
<https://www.christian-center.jp/>



「タマネギころころ」

切り絵 中谷隆志

春学期チャペル・アワー統一テーマ

「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」
（イザヤ書 6章8節より）

不安や心配を抱えながらも託された「事柄」をやり遂げなければならぬ場面があります。幼い頃の経験でいうと「おつかい」がそうかも知れません。歳を重ねればその事柄はさまざまですが、共通するのは責務を果たし、送り出した元へ戻ることです。「おつかい」で頼まれた物が探せず、気持ち沈んでも帰路には着きます。結果はどうあれ送り出した人の元へ戻るのです。

「わたしを遣わしてください」と神に応えた預言者イザヤ。神の言葉を蔑ろにする王を批判し、国の滅亡を預言します。周りからは理解されず孤独の中、語り続けます。しかし、イザヤはこの役目を投げ出すことをしませんでした。自分を遣わしてくれた方、戻るべき揺るぎない存在があったからです。何より、神は最後には希望を語られるのを知っていたからです。

私たちはそれぞれの人生において「遣わされて」います。進む道がいつも平坦とは限りません。混迷する時もあります。それでも「わたし」を遣わしてくれた方がいることで、結果はどうであれ、そこに戻り、慰められ癒され勇気づけられ、また歩き出すことができるのではないのでしょうか。

（キリスト教文化センターチャプレン 仲程 愛美）

